

皇帝の隠し子はご都合主義を望みません

CHARACTERS



◆ブルーノ・ソルジ◆

アルの部下。
アルの美しさに感銘を受け
崇拜している。



◆ステファニア・ベッティオル◆

ベッティオル皇国の皇女で
隣国ボナバルト王国の王太子の
婚約者候補。



◆アドルフ・ベッティオル◆

ベッティオル皇国の第三皇子で
次期皇帝として期待されている。
野心家で、計算高い。



◆ネロ◆

リタと一緒に住んでいる黒猫。
しかしその正体は闇の大精霊
ハデス。ツンデレな性格だが、
リタにとっては良き姉的存在。



◆ぷっぴい◆

リタと一緒に住んでいる
マイクロプタ。しかしその正体は
光の大精霊ルミナ。
三度の飯より美人が好き。



◆ヴェルデ◆

ベッティオル皇国の皇帝に仕える
緑の鳥。しかしその正体は風の
大精霊シルフ。

◆マロン◆

普段はかわいい
ハリネズミだがその正体は
土の大精霊ノーム。

◆ロッソ◆

俺様気質のトカゲだが
その正体は
火の大精霊サラマンダー。

◆アズーロ◆

普段は水色のカエルだが
その正体は
水の大精霊ウィンディーネ。

・アル・

リタが森で拾った夢げ美男子。
貴族のパーティーにも参加できるほど
優秀な商人らしいが、何やら秘密があるらしい。
普段は丁寧な口調で猫をかぶっているが
気心の知れた相手には口が悪くなる。



・リタ・

辺境の村に住む少女。
アルを拾ったことにより生活が一変する。
薬づくりが趣味で、薬師として人助けをする。
何やらすごい力を秘めているらしい。

プロローグ

ベッティオル皇国の最北端。隣接するボナパルト王国との国境付近の森。その奥深くに――今はもう地図からも抹消された、名も無き村があった。

しかし、なぜかその場所に十六歳の少女が一人で住んでいた。彼女の名はリタ。

茶色の髪を一つにまとめ、畑を耕す姿は健康そう。だが何より、辺鄙な場所に不釣り合いなほど美しい外見の持ち主だった。特に、彼女の瞳はとても珍しい濃い紫色で、見る者を惹き付けるような不思議な魅力を湛えていた。ただ、それを指摘する者はこの場にはいない、はずだった。

「リタ！」

平穏な空気を壊す切迫した声が響き渡る。

そして森の中から現れたのは、一度見たら忘れられない美丈夫だった。

「どうしてアルが？」

リタは驚きつつも彼に駆け寄る。久しぶりに会って、胸中に喜びにも似た感情が押し寄せてきた。けれど、そんな気持ちは、彼の尋常ではない顔色の悪さを見たら吹っ飛んでしまった。

サラサラの銀髪から覗く額には汗が滲み、涼やかな水色の瞳は視線が定まっていない。

(この反応は……毒!?)

ここまで走ってきたような様子からして、おそらく毒は遅効性ちこうせいのもの。アルの顔色は悪く、持っ
てあと三時間といったところだった。突然、ガクンとアルの片膝が崩れた。それを見てリタは慌て
て彼の体を支える。

「アル、大丈夫!？」

「あ、ああ……なんとか。それよりも早く、隠れる。追手が……まだこの森の中に……」
また命を狙われているのかとリタは驚いた。彼と初めて会った時もそうだったのだ。

いったいどんな理由があれば、何度も命を狙われるような人生を送る羽目になるのか。

とにかく、リタは耳を澄ませ、周囲の気配を探った。

(たしかに、森が騒がしい)

自然の中で育ったリタの耳は常人よりも少しばかり良い。

「分かった。すぐに解毒するから頑張つて。寝ちゃダメだからね!」

彼を引きずるようにして家の中に運び、アルが気を失わないようにと、矢継ぎ早に質問をする。

『いつ、どんな毒を仕込まれたのか』、『どういう経緯でここまで逃げて来たのか』。

その間に、先ほどよりもさらに顔色が悪くなったアルがなんとか意識を繋ぎ留め、答えた。

「護衛の中に裏切者がいたんだ……っ。無理やり毒を飲まされて……おそらく前回、俺を暗殺しよ
うとした奴と……通じている者が……いたんだと……」

次々と飛び出す不穏な言葉に、リタは驚愕きょうがくしてしまう。

ポタポタと汗を流すアルの辛そうな姿に、早く解毒薬を飲ませなければと気持ちせが急く。

薬を探そうと立ち上がるうとした瞬間、息も絶え絶えのアルにリタは腕を掴まれた。

「リタ、聞いてくれっ。……が、お前を探している」

「え？ 今なんて……」

「この森に潜んでいとされるとされる……『……の愛し子』をつ」

アルの言葉は途切れ途切れで要領を得ない。だが、彼が何か重要なことを伝えようとしてしてくれ
ているのは分かった。

「だから、リタ……ぐっ」

アルが苦しげに己の胸元を握りしめる。

「アル! それ以上はもう大丈夫だから、あと少し、あと少しだけ耐えて!」

リタはすぐさま立ち上がり、解毒に必要な材料を家のあらゆるところから引っ張り出した。

幸いリタは薬師である。薬なら山ほど家にあるし、なくてもここは深い森の中だ。薬になる材料
は採りに行けばいい。

その時、リタが騒がしくする音を聞きつけたのか、なんだなんだと家の中から彼女の友——動
物たちが姿を現した。マイクロブタにネコ、カエルにハリネズミ、トカゲと勢揃いだ。

しかし、今のリタには彼らに構っている暇はない。

マイクロブタのぷっぴいはアルを見て「ぷびっ!？」と声を上げ、急いで駆け寄った。

ぷっぴいは賢いかしこブタなので、アルのことを覚えていたのだろう。

「ふ、ぶっぴい……ひさしぶり、だな」

顔を歪めるほど辛いのだろうに、それでもアルはぶっぴいに微笑みかける。その姿をちらりと横目で見ながら、リタは手と口を動かし続けた。

「アルが飲んだ毒はおそらく……解毒するには……」

幸いなことに、アルが飲んだ毒にリタは覚えがあった。

材料さえあれば、リタでも解毒できる——と、そこまで考えてふと気づく。

「ダメだ。スキナだけない。摘みに行かないとっ！」

そう言った瞬間、ぶっぴいが「ぶびい！」と大きな鳴き声を上げた。

見れば、いつの間にかぶっぴいの口には、今まさにリタが求めているスキナが啞えられていた。

「ぶっぴい！　ありがとう！」

リタはぶっぴいからそれを受け取り、早速、洗ってすり潰す。その瞬間、キラキラした金色の粉のようなものがリタの手元から舞った。

「げほっ……お、おい。なんだその光っ……」

アルが咳き込みながら、何か言っているが、集中しているリタの耳には届かない。

適切な処置を施した材料を全て小袋にまとめ、鍋に投入し、水を注ぐ。その時、リタの側にいた水色のカエル——アズーロが「ケロッ」と鳴き、タイミングよく水面が淡い青の光を放った。

「げほっげほっ……水が光った、だと……」

意識が朦朧としてきているのか、アルのひとり言が多い。だけど、今はそんな呟きに構ってはい

られない。ひとまず無視して、リタは火打ち道具を手にとった。

しかし、こういう時に限って上手くいかない。何度か試していると、ようやく小さな火が灯った。

「よしっ……でも、これじゃあ火力が足りない。えっと……確かこちらへんに」

リタが火付きの良い乾いた薪があつたはずと探している間に自然と火力が上がった。

リタは燃え盛る炎を見てホッと息を漏らした。

しばらく煮詰めた後、火を消し、鍋の中身をカップへと移し替える。

本来数十分かかる解毒剤が数分で完成した。驚くべきことなのだが、リタにその自覚はない。

「はい、アル。飲んで」

アルは何か言いたげに眉間にグツと皺を寄せた。

リタはその視線に気が付くこともなくアルの背を支えて、ゆっくりと口元へ運んだ。

彼がゴクリと嚥下する様子をリタはじっと見つめていた。

薬を飲み切って数分後。意識が朦朧としていたはずのアルは、己の手をひたすら開閉させると、リタを見つめ、茫然と呟いた。

「……やはり、リタ。お前が『精霊の愛し子』だったのか？」

リタは首を傾げる。それは一体なんなのか、さっぱり分からない。そもそも、その『精霊』という言葉自体、今日初めて聞くものだ。

「何、変なことを言ってるの？　それよりも、体は大丈夫？」

「あ、ああ、もうすっかり全快しているようだ。ありがとう、リタ。……って、そんなことより！お前は今自分が何をしたのか理解していないのか!?」

アルが元氣になったのはいいことだが、いきなり凄^{オドロク}い剣幕で捲^{マク}し立てられてリタは困惑する。

「え？ 何って……薬を調査しただけだよ。たしかに、珍しい毒ではあったけど、ここは森の中だからたいの素材は手に入るし……」

変なことは何もしていないと主張するリタに、アルの表情は険しくなった。

（そ、そんな綺麗な顔で凄まないでよ！ 怖いんだけど）

「だけだ?! 暗殺に使われる毒の種類を瞬時に見抜き、その場で解毒することを、か？ 宮廷医師にも薬剤師にも難しいことを、お前はたった数分でやり遂げたんだぞ？ リタが優秀な薬師だというのは前回の件で知っていたが、それにしても異常すぎる！」

興奮状態のアルを、リタは宥^{なだ}める。

「まあまあ、落ち着いて。……おかしいわね。解毒は済んでいるはずんだけど……」

「俺はいたって正常だ！ 正常すぎて腹が立つくらいだぞ。変なのは、リタ。お前の方だ。炎が勝手に燃え盛ったのは……まあ、まだいい。そういうこともあるかもしれない。でもな、普通は調剤時に薬草も水も光つたりしないんだよ。あの現象をどう説明するつもりだ？」

「どうって……何を説明してほしいのかわからないんだけど……。ああ、アルは腕のいい薬師に出会ったことがないのね？ 質の良いものができあがる時って、ああいう風に光るのよ？」

その瞬間、アルの透き通るような白い肌が怒りからか、一気に真っ赤に染まった。

「んなわけあるかあああ！ だいたい、俺が飲んでからたった数分でこんなにピンピンしているのもおかしいんだぞ!」

リタは両手で耳を押さえながら「うるさつ。元氣になったんだから別にいいじゃない……」と唇を尖らせた。そんな様子のリタにアルはがつくりと肩を落とす。

「リタ。お前の普通は一般人の普通とは違う。それを知る機会が今までなかったんだだろうが……。俺は確信している。そして、その理由が『精霊の愛し子』だからということもな」

「それ！ さっきから何度も言っていたけど、『精霊の愛し子』って何？」

知らない単語を出されても困ると告げれば、アルが「は？」と声を漏らした。

「ベッティオル皇国の民が『精霊の愛し子』を知らないだ?! そんな訳が……いや、あり得るのか。リタの育った環境を考えれば……」

「ちよつと、自分だけで納得しないでくれる？」

不機嫌そうな顔のリタを、アルは得心した顔で見やる。そして、いつの間にかリタの周りに集まって、不安げにアルを見つめていた動物たちに視線を向けた。

「詳しくは彼らに聞いた方が早いだろう」

「彼らって……？」

アルの視線を辿った先には、この場から逃げ出そうとしている後ろ姿のマイクロプタのぷつぴい。ぷつぴいはビクリと跳ねた後、その場で固まったまま動かなくなった。リタは「ぷつぴい？」と名前を呼んでみたが、今度は全く反応しない。

しびれを切らしたのか、黒猫のネロが「仕方ない」とでもいうように「ニャア」と鳴き、腰を上げた。そしてぷつぴいに近づき、彼女のお尻に思い切り爪を立てた。すると――

「いつ！ たああああああい！」

「ええええええ！？ ぷつぴいが喋ったあ！？」

まさかの声が響き渡り、アルは深く嘆息したのだった。

第一章 訳あり銀髪イケメンを拾いました

リタがはじめてアルに出会ったのは、今から数か月前。

――あの日も、彼は命を狙われていた。

珍しく人の気配がする森。逃げ惑う動物たち。

そんな異変を感じ取ったリタは、とりあえず様子を見に行くだけのつもりだった。

身を隠した草木の間から見えたのは、顔を隠した黒ずくめの者が数人と、旅人が一人。そして、知り合いのクマが一頭。それを目にした途端、リタの喉がヒュッと鳴った。

知り合いのクマ――くまじろうは見た目こそ厳つい^{いか}が、性格は怖がりで臆病。主食は野菜で、人を襲うこともしない。恐ろしげな風貌で固まっているのも、ただ怯えて動けなくなっているだけ。

しかし、黒ずくめの者たちは武器を構え、今にもくまじろうに襲いかかろうとしていた。

リタは全身から血の気が引くのを感じ、それと同時に焦った。

（くまじろうをどうにかして助けなくちゃ！）

武器になりそうなのは偶然にも畑仕事のために持っていたこの砂袋だけ。深呼吸をしてから、手に持っていた砂袋をぎゅっと握りしめると、黒ずくめの者たちとくまじろうの間に躍り出た。

「くまじろうに手を出さないで！ 私が相手よ！」

相手が動く前に、ずっしりとした凶器を振り回す。側頭部を狙って勢いよく当てると、黒ずくめの一人が見事に倒れた。他の黒ずくめの者たちが攻撃に転じようとしたところで――彼らはなぜか何もない地面で躓き、そのままひっくりかえってしまった。

その隙をリタは見逃さず、再び砂袋を振り回す。一緒についてきていたぶつびいもタイミング良く加勢してくれ、くまじろうを救い出すことが出来たのだ。

そして、残ったのは旅人のみ。

リタはくまじろうを庇うように再び前に出る。旅人も黒ずくめの者とやり合っていたが、彼がこちらを攻撃してこないとも限らない。くまじろうに手を出すなら容赦はしないと袋を持ち直した。

そんなリタの様子に、旅人は慌てて持っていた短剣をしまい、両手を上げた。

深く被ったフードのせいで表情は確認できない。敵意はないようだが、だからといって安心もできない。状況からみて、訳ありなのは確実だ。

『怪しい人物には近寄らない！』

これは亡き母から教えてもらった教訓の一つ。その教えに従い、リタは面倒なことになる前に、くまじろうとぶつびいを連れて、その場から立ち去ろうとした。しかし、その男は声をかけてきた。

「先ほどは、助かりました。感謝申し上げます」

「いえ、私は何も。急ぎますので……」

しかし、そう言っただけで背を向けた瞬間、後ろでドサツという音が聞こえた。

振り向けば、先ほどの旅人が倒れているではないか。

リタは啞然とした。無視して去ることもできるが、それでは寝覚めが悪い。

渋々、リタは旅人に近寄り、顔を覗き込む……そして目を見開いた。

フードの下から出てきたのは、この世のものとは思えない美貌。白にも近い銀髪と、顔色の悪さも相まって、今にも消えてしまいそうだ。声を聞いていなければ、女性と間違えたかもしれない。

（う、美しい。まるで絵本に出てくる儂はかななお姫様か王子様みたい……）

思わず、じーっと顔を眺めていると、ぶつびいがリタの目の前で飛び跳ねた。

ハッ！ と我に返る。次いで、くまじろうに鼻先で背中を押され、促されるまま男の腹にかかる

ローブをめぐった。

今度は別の意味で息を呑んだ。

「ひどい怪我！」

男の脇腹には深い切り傷があった。いや、よく見れば他にも傷はたくさんある。ざっと確認したが、一番酷いのはやはり脇腹だ。

（出血量が多すぎる）

このままではまずいと思ったリタは、止血できるものはないかと慌てて周囲を見回す。

近くに落ちていた男のカバンが目に入る。遠慮しつつも中を物色すると、幸いにも応急手当に使えるようなものがあった。けれど、これは気休め程度、この森の中ではまともな治療はできない。

悩んだ末、リタは彼を自宅に連れ帰ることにした。

決して素顔がイケメンだったからではない。

『近づいてくるイケメンには気をつけろ』

これも亡き母の教えの一つだが――

（彼はただお礼を言っただけ。そして、私がしているのはただの人助け。薬師としては間違っていない。そうよねお母さん？ これはセーフよね？）

そう言い訳し、リタは男を半ば引きずるように担いで歩き始めた。

リタの家は小さい。一軒家にもかかわらず部屋数も少ない。一番広いのは玄関から丸見えのリビングだ。それでも、一人（と動物五匹）で暮らすには十分だった。

しかし、こうして男性一人が増えるとなると少々手狭に見える。

（布団は二枚並べるのが限界ね）

リタは傷薬を作りながら、ちらちらと布団に横たわっている男に視線を向けた。

ぼろぼろの外套がいのうを脱がせると、血で汚れてはいるものの、明らかに上質な生地で作られていた服が現れた。さらに、外套の裏ポケットからは、貴族が使うような厳重な封蝋ふうろうが施された手紙も。

（うう。やつぱり連れて帰ったのは早まったかなあ……いや、でもあそこで見殺しにするのは……）

葛藤するリタを横目に、今にも涎よだれを垂らしそうな様子でマイクロプタのぶっぴいが、男の顔を覗き込んでいた。たしかに、汚れを拭い取っただけなのだが、彼の美しさレベルが二倍になった気がする。

「ぶっぴい。それ以上近づいたらダメだからね」

リタに注意されたぶっぴいは、少しだけ顔を離れたが、その後も飽きることなくずっと男の顔を眺めていた。

男が目を覚めたのは数刻後。

声にはならない叫び声とともに彼は目を覚ました。まあ、起きてすぐにぶた鼻が見えたら叫びたくなるだろう。普通、寝起きで見えることはない光景だ。

「ぶ、ぶた？」

戸惑いの声を上げる男の横で、ぶっぴいはイケメンだわ〜とでも言うように体をくねらせる。ぶっぴいは「ぶびい〜」と、心なしかいつもより高めのトーンで鳴き、男の脇腹を突いた。

男は顔を顰め、「そこはあまり刺激しないでいただけると助かるのですが」と丁寧な物言いです。

しかし、何を思ったのか、すぐに男は首を傾げると、掛け布団をはぎとり、己の服をまくりあげた。

突然の行動に、ぶっぴいは「ぶっぴっ！」と声をあげ、照れたように顔を逸らした後、チラチラと繰り返して盗み見る。彼女の視線の先にあるのは、男の中性的な顔に反したうつすら割れた腹筋。

しかし、男が気になっているのはそこではなかった。

あるはずの傷がないのを確認し、彼は訝いぶかしげに眉根を寄せる。不審そうに思索する男にリタは声をかけた。

「大丈夫ですか？」

リタの声に反応し、男はさつと服を直した。彼の顔には強い警戒心が滲んでいる。

「あなたが手当てを？」

リタは「ええ」と頷き返す。何食わぬ顔をしているだろう自分に「……本当に？」と男はなぜか半信半疑だ。

「はい。というか……この場に私以外いないのに誰がするんです？」

「……薬師だったのですね」

男はテーブルの上の傷薬を一瞥する。

「ええ、一応。でも、正式にそういう職業に就いているわけではないので、ただの自称みたいなものですけど……」

母曰く、王都や大きな町などでは患者を診る『医師』と、薬を作る『薬剤師』に職業が分かれているらしい。一人で全部やった方が早いのに、なぜわざわざ分ける必要があるのだろうか、リタは不思議に思っている。

男が怪訝そうに「そうですか」と返すのを見て、もしかしたら出所不明の薬に嫌悪感があるのかしらとリタは焦って言葉を加える。

「あ、怪しい薬じゃありませんよ！ この森で採った薬草ですし、調合したのは私です……」

言ってから気づく。自身の潔白が証明できない以上、どちらにしても怪しさは変わらないということに。だが、男は心配しているのはそこではないと言いたげに首を横に振った。

「助けていただいたのです、それは構いません。……それよりも……あなたは何者ですか？」

「何者って……だから、ただの薬師ですけど……」

「ただの薬師？　へえ……」

疑うかのような男の反応に、リタは不快そうに眉根を寄せた。

「すっかり元氣になったみたいですね」

「おかげさまで……これほど見事な手当てを受けたのは初めてです」

リタの反応に何を思ったのか、にこりと表情を変えた男の顔があまりにも美しく、リタは思わず一瞬見とれてしまった。

（はっ！　いけないいけない。お母さんの教訓を忘れるところだった！）

「それではどうぞ、お帰りください」

リタが己を律し、玄関を示すと男が固まった。

「元氣になったんですね？　なら、どうぞお帰りください」

これ以上、得体のしれない男の笑みに影響されるわけにはいかないのだ。リタは自分の中で一番いいと思われる笑みを浮かべ、再度圧をかけた。

すると、男は本当に立ち上がろうとして……立ちくらみを起こした。

そうなるかと分かっていて意地悪を言ったリタは、わざとらしいため息を漏らす。

「冗談ですよ。わざわざ助けたのにそんな鬼畜なことするわけじゃないでしょう。傷はもう大丈夫でも、流れた血はどうにもならないんですから。完全に回復するまではうちで休んでいってください」

「よろしいのですか？」

じつとリタを見上げてくる男。

（綺麗な目……まるで湖みたいな澄んだ水色）

「……いいですよ」

気づいたらそう返していた。しまった！　と思っても、もう遅い。

「ありがとうございます。では、こちらを」

男が差し出してきたのは、外套に忍ばせていたお金が入った袋だった。かなりずっしりしている。しかし、リタはそれをそのまま突き返した。その対応に男は困ったように眉尻を下げる。

「助けてもらったお札と宿代ですから、遠慮せずもらってください」

「いりません」

「それは困ります」

「私も困ります。ここには行商人や旅人は来ないんです。村を出てお金を使う機会もありません。つまり、私にとってこのお金はただのゴミも同然です」

人生で初めて遭遇した『旅人』を、リタは一瞬で絶句させた。

「ゴ、ゴミ……。そう、ですか。そういうことなら仕方ありませんね。ですが、私には他に渡せる物がないのですが……」

困ったように微笑む儂げ美人。

だが、リタはその見た目に騙されないように一度咳払いをしてから意図的にキリツとした表情を

浮かべた。

「では、手伝ってもらうことにします」

「手伝う？　何をですか？」

警戒心を強める男に、リタは続いてニヤリと口角を上げた。

（働かざる者食うべからず！　お金ではなく、その体で払ってもらいましょう！）

「それはまだ秘密です。まずは、体を休めないと。私はリタ。あなたの名前は？」

「私はアル。アルと言います」

——これが、ただの森の住人であるリタと絶世の美貌の持ち主、アルの出会いだった。



数日前に森で拾ったイケメン——アルとの生活はドキドキワクワク……と思いきや、そうはならなかった。

彼は療養生活一日目から、あるうことか本性を現したのだ。丁寧口調の儂げ美人が、いきなり傲慢お坊ちゃんに変わった時の衝撃といったら——正直、かなりショックだった。

リタが「なんで態度を変えたの？　そのままでよかったのに」というようなことを遠回しに本人に告げれば、大きなため息を吐かれた。

「互いのためだ。世話になっている間に、変に好意を持たれても困る。君だつて無駄に傷つきたく

はないだろう？」

そんな彼の言い分に、好感度は一気に下がった。

（余計なお世話よ！ 言われなくても、あんたなんか好きにならないんだから！）
しかし、現実はその簡単ではなかった。

——「好きにならない」

そう思ったのが二日前なのに、結局——

「顔が良すぎるのよね……」

リタは「はあ」とため息をついた。アルが何をしでかしても最終的には、彼の顔に免じて許してしまう。あの美貌に微笑まれると、気付いたときには頷いているのだ。

（これもあれもそれもぜーんぶ、アルの顔がいいせい……）

ただ、だからといって恋愛には結びつかない。というのも、彼は顔以外はからつきしのポンコツだった。リタはお金をもらう代わりに、アルに家の手伝いをさせようと思っていたのだが……

「包丁？ 剣なら持ったことがあるが……」

渡した野菜は全てみじん切りになり、鍋の番を頼んだら中身は全て丸焦げ。

「服のお直し？ そんなの新しく買えばいいだろう。つて、ここでは買えないんだったな。……あいたつ！ 俺には無理だ！ もう裸で過ごすから直さなくていいつ」

自分の服だというのに、アルが早々に音を上げたせいで、結局リタが調節した。何を頼んでも、失敗するか、放り投げるか。

いったい、彼は何ならできるのか……

「じゃあ、私が収穫した野菜を家まで運んでくれる？」

すごく簡単な仕事を任せたつもりだった。

それなのに今、彼は布団の上で上半身裸になり、うつ伏せで寝ている。顔を枕に押し当て震えているのは、おそらく屈辱的な感情を抑えるためだろう。

「俺は肉体労働が苦手なんだよ。そもそも、怪我人は安静にしているのが一番大事なんじゃないのか？」

くぐもった声が聞こえてきた。

「た、確かにそうなんだけど。これくらいならリハビリにちょうどいいと思ったのよ……それなのに、まさかこんなつ」

「笑うな！」

薬を塗る指先の震えでバレてしまったらしい。

（まさか、あれくらいで腰を痛めてしまうなんて誰が予想できるのよ）

聞けば、彼はいつも家の中で書類と向き合う仕事ばかりをしていたという。

（それにしてもひ弱すぎでしょう）

それを言うと、もっと拗ね（す）そうなのがして、リタは本音を隠し、大人の対応をする。

「そうね。貧血症状を甘く見ていた私のせいだわ。ごめんなさい」

「ああそうだ。お前のせいだ」

（我慢よ、我慢。相手は怪我人よ）

「ぐっ」

「あ、ごめん」

そう思いつつも、無意識に指先に力が入ってしまったらしい。

「謝罪が軽いっ」

「まあまあ。痛みは生きている証拠なんだから、少しは我慢しなよ」

「っ。俺に対してここまで雑に接するのはお前くらいだぞ」

リタはおざなりに「はいはい」と返しながら、アルの腰のラインに沿って丁寧指を滑らせた。

アルの肌は驚くほど白く滑らかだ。だが、きちんと肌の下には筋肉が感じられる。

（程よい筋肉ね……って、こんなことを考えているのがバレたら、またアルに怒られるわ！）

ふと、アルが静かになっていることに気づいた。寝たのだろうかと、リタが様子を窺^{うかが}おうと身を乗り出すと……アルと目が合った。びっくりして、慌てて体勢を戻す。

「ア、アル。起きていたのね」

リタが焦りながらそう言えば、眠そうな声でアルがポツリと呟いた。

「リタ。お前の手、温かいな」

「え……平熱が高めだからかな？ 嫌だったならごめん」

「いや。嫌ではない……むしろ、心地いい」

「え？」

「誰かに触れられて、こんな風に思う日がくるとは……」

うとうとしていたアルはそのまま寝てしまった。すーすーと寝息が聞こえてくる。

リタはアルから離れ、そっと掛け布団をかけた。頬が熱い。

（……何よそれ。あんなに冷たく線引きしてきたくせに、無警戒どころか、急にそんな無防備に甘えるようなことを言うなんて……これだからイケメンはっ）

そこから、アルの回復は想像以上に早かった。一番深かった傷も今ではうつすらと痕が残っている程度だ。ただし、それはあくまで外側だけの話。

数日前の大怪我でアルが流した血液の量はかなり多かった。外傷と比べ、体内の傷は分かりにくい。だからこそ、リタはアルの体調を細かく確認するようにしていた。

「アル。こっちを向いて」

リタはそう言って、彼の頬を両手で包み込んだ。

アルが息を呑む。リタに至近距離まで顔を近づけられ、アルの頬がうつすらと赤く染まった。

しかし、薬師モードに入っているリタは、彼の反応を気にも留めず、すぐ傍でふっぴいが鼻息荒く見守っていることにも、気が付いていなかった。

その時、アルがリタとの距離の近さに耐えきれなくなったのか口を開いた。

「こ、これは今、何をしているんだ？」

「ちよっと黙ってて」

不意にアルの下脛を軽く押し下げる。

「うーん……やっぱりまだ出血量に見合うだけの血は作られてないみたいだね」

次にアルの唇に触れる。その指先はどこまでも事務的だが、場所が場所だけに、彼の頬はさらに赤く染まっていく……が、リタはそれにも気づかない。

「唇の色は白っぽいし……あと少し、というところかな」

リタがゆっくり視線を上げると、アルの目とかち合った。至近距離で見た彼の顔が、いつの間にか真っ赤に染まっていることに気づいて驚く。

「アル……顔が真っ赤よ。熱でもある……」

「ない！ もういいから触るな！」

彼の額に触れようとしたところで、手を払われた。そんなアルの反応にリタはムツと顔を顰める。（何!? あの態度!）

体調を気遣って、真面目に容体を診ていただけだというのに、あの言い草はあんまりではないか。せっかくの親切心を乱暴に跳ねのけられたような気がして、リタの胸にふつつと怒りが湧き上がってきた。これ以上一緒にいたら、余計に腹を立ててしまいそうだ。リタは頭を冷やす意味も込め、アルを置いて一人外に出た。



「リタ。あいつ、距離感おかしいだろう。俺が期待するなど言っただけ……この家には俺ら二人しかないんだぞ。普通なら、そろそろ色仕掛けの一つや二つしてきてもおかしくないのに……あいつは俺のことを男とすら見ていない。あいつの目には俺はただの患者としか映っていないのか? いや、それでいいはず。なににこんなイラつくんだ」

アルはくしやりと前髪を掴み、かぶりを振った。

「そんなことより……どうしてリタはこんなところに一人で住んでいるんだ? 気になるのはそれだけじゃない。薬師としての腕前。宮廷医師や薬剤師をかき集めてもリタにはかなわないだろう。それでいて、本人は自覚無し。リタの周りも全てがおかしい。おかしすぎる。ああ、知りたいことが多すぎて、頭がおかしくなりそうだっ」

それは彼にとって、生まれて初めての感情だった。



アルがリタの家に滞在したのは一週間ほど。予定より早く、彼は村を出て行った。本来ならもう少し様子を見た方が良かったのだが……重要な用事があると言ったアルを、リタは止められなかつ

た。代わりに、ありったけの薬を用意した。旅の道中、彼の身に何が起きても困らないように、と。

「それじゃあ……またな」

「またね」

さよならは互いに告げない。あつさりとした別れ。一番悲しんでいたのはぶっぴいだろう。

アルが出て行くギリギリまで鳴いて甘え、姿が見えなくなるまでアルの背中を見送り続けた。

「ぶっぴいおいで」

リタが名前を呼べば、肩を落とし、とぼとぼ戻ってくる。抱き上げてやると鼻をすんすん鳴らし始めた。胸がぎゅつと締め付けられる。この痛みはぶっぴいを思つてのものか。それとも、自分の気持ちなのか。リタはただひたすらぶっぴいの震える背中を優しく撫で続けた。



「はっ！ 今のは白昼夢？ そうよね、夢に決まってるわ。アルと初めて出会った時のこととか、療養生活のこととか……。挙句の果てには、再会したアルがまた命を狙われていて、ぶっぴいが人間の言葉を喋るなんて。あーおつかしい……って」

リタは誰に話しかけるでもなく一人で笑い、ふと視線を感じ、そちらに顔を向けた。そこにいたのは、見間違えようなない美丈夫と、プリッとお尻を突き出し、プヒプヒ鳴いているマイクロプタのぶっぴい。そして、その隣にはいつでも追撃できるよう、爪をかまえている黒猫のネロ。他の動

物たちはじっとリタを見つめていた。

「あ、あれ？ 夢じゃ……ない？」

アルが深いため息を吐く。

「この状況でよく現実逃避できたな」

低く、呆れ果てた声。それは夢の中で聞いたものよりも、遥かに生々しく鼓膜を揺らす美声。

「え、えええ！ 夢じゃなかったあああ！」

リタの絶叫は窓や扉を突き抜け、外からは驚いた鳥たちが一斉に羽ばたく音が聞こえてきた。しばらくしてどうにか正気に戻ったリタは、アルに抱きかかえられたぶっぴいと対峙した。

妙な緊張感がじわじわとリタを襲う。

（い、いったい何から聞けばいいのか……気になることが多すぎる！）

「って、ちよつと待って。ぶっぴいはなんでこんな時までアルの腕の中なの？」

リタの口から最初に飛び出したのは、そんなどうでもいい質問だった。

ぶっぴいがしよげた声で告げる。

「だ、だって……逃げたくなった時に押さえ込んでくれる人が必要でしょ？」

「あ、ああ……そういうことね。そっかそっか……えっと……やつぱり喋ってる……」

リタの精神状態を察したのか、ぶっぴいは自ら説明をし始めた。

「リタ。アタシたちはアルの言う通り、本物の動物じゃない——『精霊』なの」

『精霊』？ そっぴいアルもそんなこと言っていたけど……『精霊』とか、『精霊の愛し子』と

か。それっていったいなんなの？ 聞いたことない言葉なだけど……」

ぶっぴいは一瞬言葉に詰まった。

「……リタのお母さんは、徹底して『精霊』についての情報をリタに与えなかったからね」

「え？」とリタは小首を傾げる。けれど、ぶっぴいはそれについては答えず、話を進める。

『精霊』っていうのは、アタシたちのことなだけど……『精霊』はこの世界の自然の力を司る存在なの。どんな力かという……見せた方が早いよね」

ぶっぴいが片腕を上げると、突如、ぶっぴいとリタの間に拳一つ分くらいの光の玉が現れた。光の玉は徐々に大きくなつていき、部屋全体を明るく照らす。そして、数秒後、消えた。

「すごいっ」とリタが感嘆の声を漏らすと、ぶっぴいが小さな胸を張った。

「でしょう。でも、アタシたちの力はこんなもんじゃないのよ？ なんていったって、アタシたちは精霊の中でも特別な力を持つ大精霊なんだから！ ただ、大規模な力を発揮するには条件があつて……それが人間との契約なの。人間を主とすることで、アタシたち精霊は本来以上の力を引き出せるようになるし、契約した人間はアタシたちの力を自由に使えるようになるってわけ！」

そこまで言つて、ぶっぴいがリタの反応を窺うようにじつと見つめる。

しかし、いまいち理解しきれていないリタは、一応神秘的な表情を浮かべつつも、「へえ、それは凄いいえ」と先ほどとは違つて明らかに単調なトーンで返した。

ガクリとぶっぴいが頭を垂れる。

「リタが無欲なことを喜ぶべきなのか、アタシたちに興味がなさすぎると悲しむべきなのか……」

ぶっぴいの呟きにツツコミを入れたのはアルだった。

「いや、リタのことだから、自分が当事者だと気づいていないだけだと思うぞ？」

「まさか、そんなわけ……」と顔を上げたぶっぴいは、瞬きを繰り返しているリタを見て、再び項垂れた。アルがぶっぴいを慰めるように彼女の背を撫で、言葉を補足する。

「リタ、精霊と契約している主というのがお前のことだ。言つただろう。お前が『精霊の愛し子』なんだと……今の説明を聞いた感じだと、契約している存在が『精霊の愛し子』なんだろう？」

アルの質問にぶっぴいが頷き返す。

「そうよ。本来は文字通り『精霊に愛された人間』のことを指すんだけど、現代の人間の認識に合わせるなら、アルの言う通り『精霊と契約している者』って解釈で合ってるわ」

投げやりに呟くぶっぴいの様子が気になったものの、リタは自分が『精霊の愛し子』とはどういうことかと聞き返した。

「私、ぶっぴいと契約した記憶がないんだけど？」

ぶっぴいは「あー……」と声を漏らした。

「実は、偶然にも契約するための条件が揃った時があつてね……精霊と契約するためには『精霊の名前を呼ぶこと』と『主の心からのお願い』、それに対する『精霊の同意』が必要になるのよ」

「え、私そんなお願いなんてしたっけ……」

首を捻るリタ。ぶっぴいは頷いた。

「一緒に暮らそうって言ってくれたでしょう？ アタシたちはそれに同意した。まあ、真名ではな

くリタが名付けてくれた名前での契約だから、仮契約になったんだけど……」

リタは実感がないままに契約を結んでいたことに驚愕する。いや、それよりも、途中に聞き捨てならない言葉が挟まっていた。

「ね、ねえ……アタシたちってまさか……」

「もちろん、皆、アタシと同じ『精霊』だよ！」

そう言ったぷっぴいの声に反応するように、ネコとカエルとハリネズミ、トカゲは動いてみせる。リタは気が遠くなりそうになるのを楽しんでいるのか堪えた。

しばらくして、ようやくリタは状況が呑み込めてきた。とにもかくにも、これようやく難しい話は終わるとリタがホッとしたのも束の間、今度はアルが次の問題を提示した。

「これでなぜ皇帝がリタを狙っているのか、透けて見えてきたな」

「ちょ、ちよつと待って。その話も初耳なだけど!？」

「言っただろう。お前を探している追手がいると。そいつらが皇帝の息のかかった連中なんだ」

突然の特大情報に、悲鳴にも似た声を上げるリタ。

「な、なんで私なの？ アルを狙っている追手じゃなかったの？」

「それとは別だ」

しれつと言うアルにリタは頭を抱える。

「だ、だめだ……情報が多すぎて、ちつとも状況が分からないんだけど!？」

アルは何故分からないのかと呆れた視線をぶつけるが、ぷっぴいは「それも仕方ない」と告げた。「生まれた頃からこの森で暮らし、母親から情報を制限されていたリタは何も知らないんだから。……きつと、皇族とは関係のないところで平和に暮らしてほしかったのだと思うわ」

「しかし、こうなってはそうも言っていられないだろう」

「そうね」とぷっぴいも返す。

「リタにはこの国の成り立ちと、皇族とアタシたちの関係性をまずは理解してもらわないと……」
そう言って、ぷっぴいは語り始めた。

この世界にまだ国という概念がなく、精霊という存在が今よりもずっと人間の傍にあった頃。ぷっぴいたちは一人の男性と出会った。傍にいても幸せな気持ちにさせる、そんな不思議な人間だった。しかし、彼は優しすぎるが故に、いつも誰かしらに搾取されていた。彼が収獲した作物は他人の物になり、彼の手元には一つも残らなかった。それでも彼はいつもここにこしていた。そのようなことが何度も重なり、見かねた精霊たちは彼に力を貸すようになる。始めは軽い善意だったのだ。

——彼の生活が少しでも豊かになればいい。それくらいのささやかな気持ち。

実際、彼の生活は他の誰よりも富むようになり、周りからも一目置かれるようになった。だからといって彼は驕ることなく、精霊たちのおかげだと常に感謝していた。彼の思いに精霊たちの気も大きくなり、つい自分たちから契約を持ちかけてしまったのだ。

『君たちがつと大きな力を使えるようになり、その力で皆を幸せにすることができればなら』
 その結果、男の——精霊の力の恩恵によってベッティオル皇国が生まれ、いつしか彼は皇帝という称号を掲げるようになった。

「というのが、この国の成り立ち、その後他国も建国していったのよ」

ぷっぴいが締め言葉の口にするのを待って、リタは驚愕の声を上げた。

「……ってことは、この国が出来たのってぷっぴいたちのおかげってこと!？」

「そうよ」と肯定しつつ、ぷっぴいの声色は優れない。ぷっぴいが暗いトーンで告げる。

「でもね、良かったのは最初だけだったのよ……」

首を傾げるリタに、ぷっぴいは苦笑する。

「初代皇帝に似て無欲なリタにはピンとこないでしょうけど……結局アタシたちの力はただの人が持つには大きすぎたのよ。初代皇帝がね、今際の際にアタシたちをお願いをしたの。『自分の血を引く子どもたちにも、力を貸してやってほしい』ってね。当時のアタシたちはその先にあるものまでは想像していなかった。自分たちの力がどんな影響をもたらすのか分からなかった。そうして、ベッティオル皇国はどんどん大きくなっていき、いつしか大きくなりすぎた……」

そしてそれが、ベッティオル皇国の皇族と精霊の間で交わされた契約となった。今では精霊の力に頼り切っている国。契約とは基本的に主側が撤回しない限り、永久に継続されるものなのだ。

「けど……アタシたちもただ黙って従っていたわけではないのよ！これ以上、不必要な力を人間

に貸さないためにも、生存している皇族の中でも最もそんな相手を選ぶことで、精霊側の負担が増えないようにしたんだから！」

ぷっぴいの言葉に引かなかったのか、アルが手を挙げる。

「人間との契約によって精霊側に負担がかかるのか？」

その瞬間、ぷっぴいを始めとする精霊側に、しまった！という空気が流れた。

沈黙が破られたのは数秒後。ぎこちなくぷっぴいが説明する。

「そ、そうね。アタシたち精霊も万能ではないから、力を酷使すると疲れちゃうのよ。でも、どんなに疲弊しても主のお願いには逆らえない……」

まだ何か秘密があるような気がしたが、それを聞く間もなく、ぷっぴいはさらに捲し立てる。

「とにかく、アタシたちは試行錯誤して、契約の穴をつくことに成功したの。しかも、リタっていう最高の主によく辿り着くことができた！」

「うんうん」と精霊たちは頷いている。知らぬうちに主となっていたリタは、ぷっぴいの話を聞いた今ではなんだか嬉しさも感じ始めていた。そんな和やかな空気をピリつかせる一言をアルが発する。

「ああ、なるほど。契約の穴……だからリタだったのか」

皆からの視線を集めたアルは、己の考えを口にする。

「リタを選んだ理由は、『初代皇帝の血を引く者』であるにもかかわらず、『その地位につく可能性が限りなく低い』からだろうか？」

尋ねられたぶっぴいは、気まずそうに認めた。

「で、でも一番の理由はリタを気に入ったからよ？」と付け加える。あまりに聞き捨てならない内容で、リタが素っ頓狂な声を上げる。

「今、私が初代皇帝の血を引く者って言った？」

リタの質問に二人は頷き返した。アルが事もなげに言う。

「リタのその鮮やかな紫の瞳は、初代皇帝の特徴だ」

「ええっ!?　じゃあ、なんで私とお母さんはこの村で暮らすことになったの!？」

「それは、現皇帝の指示よ」とぶっぴいが告げる。

リタの眉間に皺が寄った。

(いったい、どういう理由があつてそんなことを?)

疑問を口にしようとしたが、それよりも先にアルが口を開いた。

「リタ。話はまだ終わっていないぞ。というか、ここからが本題だ」

「え？」

「皇帝は、こちら辺に住む人間がリタしかいないことを把握していたんだ。リタの父親に該当しそうな皇族は見当もつかないが、おそらくすでに亡くなっているはずだ。現皇帝からしてみれば、リタは精霊の愛し子にもなりうる疎ましい存在。だからこそ、俺が国境近くの森で、腕のいい若い女性の薬師に命を救われたという話をしたらすぐに顔色を変えたんだろう」

精霊の特性を知る皇帝だからこそ、アルの傷が異常な速さで回復したことを、精霊の存在と関連

づけた。リタは己の肌がゾクリと粟立つのを感じた。

「まさか……私が『精霊の愛し子』だっていうことがバレてるの？」

不安げなリタに、アルは「いや」と首を横に振った。

「俺が知る限り、人間側は精霊と契約するためには『精霊の儀』をしなければならないと思い込んでいる。その儀式を受ける手段がないリタが『精霊の愛し子』だとは思っていないはずだ。ただ、リタの傍にも精霊がいるのでは……と疑っている可能性はある」

アルの続く言葉に、リタの顔は完全に強張った。

「現皇帝には子供が四人いるが、そのうち三人の皇子たちが『精霊の愛し子』にはなれなかった。期待されていたアドルフオ第三皇子すら契約に失敗し、今、皇国は揺れている。……残る希望は末の皇女一人だけ。皇帝は最悪の場合……皇女も失敗した時に備え、リタを手元に戻そうと考えているのだろう。何よりも大事なものは精霊の力と、そこに付随する権威だろうからな」

彼の言葉にリタは絶句する。

「……な、何よそれ。巻き込まれたら面倒なことになるだけじゃない」

リタの呟きを拾ったぶっぴいが低い声色で返す。

「それで済めばいいけどね」

すかさずアルが反応した。

「ぶっぴい。今のはどういう意味だ？」

「……リタとの仮契約がばれたら、殺される可能性もあるってことよ」

思わず「ええ!？」と声を上げたリタに、ぷっぴいは苦々しく告げる。

「過去にあったのよ。そういう事例がね。リタが使えない駒であるなら、皇帝はリタを殺して改めて別の者と契約をさせるか、監禁して力だけ搾取するでしょうね。……ま、まあ、あくまで可能性の話だけだね」

リタの強張った表情を見て、慌ててぷっぴいが言いつくろう。

けれど、過去の話を聞いた後では、リタはちつとも安心できなかった。

精霊の力があれば、枯れた大地を瞬く間に実り豊かな沃土^{よど}に変え、富を無限に生み出すことができる。国が精霊を独占したがる理由は、リタでも容易に想像がついた。

（私の薬師としての腕も精霊の力によるものだったんだ……。アルから以前指摘された薬を作る際に起きる不思議な現象。それと、異常なくらい高い薬の効果。私にとってはどれも普通のことだったけど……）

今まで自分の中にあつた常識が崩れていく音をリタは聞いた。背中に冷たい汗が流れる。

（私はただ平和に生きていただけなのに……。いつか皇帝の追手に見つかってしまうの？ 森に暮らす皆を巻き込んだ挙句、監禁されるか殺されるかしかないなんて……）

想像してブルリと体を震わせるリタを、氣遣うようにアルが優しく声をかける。

「そこで、だ。突然なんだが……。リタ、ボナパルト王国に来ないか」

アルからの予想もしていなかった申し出に、リタの口からは「え」という戸惑いの声が漏れ、思考が止まる。そして、黒猫のネロが放った「リタ、騙されちゃダメよ!」という声に我に返った。



ネロが警戒心を露わに、アルに厳しい目を向ける。

「さらっと話していたけど、この男は皇帝と会えるくらいの身分の持ち主なのよ。裏があるに決まっているわ。っていうか、そもそも、どこまで本当の話かわからないでしょう。もしかしたら、リタを探している追手がいるって話もリタを連れ出すための嘘かもよ」

突如として部屋の中に漂い始めた険悪な雰囲気。リタは内心焦りながらも、考える。

たしかにネロの言うことはもつとものだ。幾度となく命を狙われていた男が、実は皇帝と謁見^{えうけん}できるほどの身分を持つており、しかも明らかに厄介な存在である自分に「別の国に行こう」と提案するなんて、あまりに話が飛躍しすぎていて怪しさしかない。

怪しさしかない……けれど、リタはどうしても彼が自分を騙そうとしているとは思えなかった。アルの瞳に、純粹な心配の色が浮かんでいるように見えたからだ。

「アルは私を騙そうとなんかしてないと思う」

「なんで、そう言い切れるのよ？ リタ、お母さんの教訓を忘れたの？ イケメンは？」

「……イケメンはクソ。いや、でもアルは違うよ！」

勢いで押し切ろうとするリタに、ぷっぴいが加勢する。

「そうよ！ アルがそんなことするわけない！」

「明確な根拠があるわけでもなく、イケメンに激弱なあんたたちの判断は信用ならない！」

ネロの指摘に、リタはぐうの音も出なかった。しかし、ぷっぴいは負けじと口を開く。

「わかった。なら、アタシが確かめるわ。アルの話が本当かどうか、ちょっと覗かせてもらおうわ

よ！」

ぷっぴいはいきなり跳躍したかと思えば、アルの頭に頭突きをした。そして、二人の頭が触れたところから、金色の閃光が走る。

その眩しさにリタは咄嗟に目を閉じた。そして光が収まった頃、ゆっくりと瞼を開く。

アルはあまりの痛みに頭を押さえ、ぷっぴいは目を閉じフンフンと頷いてから口を開く。

「アルが言ったことは本当よ」

リタはホッと息を吐き、次いで首を傾げる。

(頭突きしただけに見えたけど……)

「今で分かったの？」

「うん。アルの記憶を見たからね。……リタにも見せた方が早いか」

そう言つて、ぷっぴいが再び跳躍する。リタは避けようとしたが、それよりも早くおでこに衝撃が襲ってきた。視界が真っ白になり、濁流のように映像が流れ込んでくる。

——おそらく、これがアルの記憶なのだろう。



数時間前、俺は用事を終え、国境付近で馬車から降りた。ボナパルト王国に帰る前に、一度リタの顔を見に行こうと考えていたのだ。俺は彼ら——ベッティオル皇国の皇帝が善意でつけてくれ

た護衛騎士二名——と別れた後、姿が見えなくなつたのを確認した。そして、わざわざ母国とは逆方向に歩き、彼女がいる森へと足を踏み入れた。

「この森は相変わらず不思議だな……」

リタと最初に出会った時もそうだったが、今もまるで彼女の元へと導くように獣道が現れる。

「きつと、驚いた顔をするんだろうな」

別れ際の彼女とぶつぴいの悲愴感^{ひそうかん}の漂う顔を思い出し、フツと笑みを漏らす。

その時、あることをふと思い出し、足を止めた。

（そういえば、次に会う時は喜ぶような土産^{みやげ}を持つていくつて約束したのにすっかり忘れていたな……）

カバンの中を漁ってみたが、たいした物は入っていない。「参ったな……」と頭をかいていると、突然、背後に人の気配を感じた。

勢いよく後ろを振り向こうとしたが、それよりも早く後ろから拘束されてしまう。

「悪いな。あんたをボナパルトに帰すわけにはいかないんだ。……依頼主から、それなりの金をもらってるんでな」

耳元でそう囁かれる。次の瞬間、勢いよく顎を押し下げられたかと思うと、無理やり液体を口の中に流し込まれた。

（――毒か！）

覚えのある味と舌の痺れに即座に身の危険を察知し、体を捻って敵の拘束を振りほどいた。その

時、敵の手から茶色の小瓶が落ちて地面を転がる。敵の顔を確認して、俺は息を呑んだ。

「お前っ……なぜっ」

俺に毒を飲ませたのは、先ほど別れたはずの護衛の一人だった。

（皇帝の差し金か？ それとも……）

思案していると、俺と敵の間に別の男が割って入る。

「おい！ お前、何こんなやつにかまつてるんだ！ やつとこの森に入ることができたんだぞ。早く探せっ！ この森のどこかにいるはずだ。……『精霊の愛し子』がな！」

「チッ、俺は別の命令も受けてんだ馬鹿！ それよりも、べらべら喋るな！ 陛下もそこまでは言ってなかっただろう。ただ、皇族の隠し子がいるとしか……」

（『精霊の愛し子』に『皇族の隠し子』……どういことだ？ この森にリタ以外の人間がいるようには思えないが……奴ら、皇帝の命令でリタを探しているのか？）

問いただそうとした時、一瞬クラリと視界が揺れた。毒が体を回り始めたのだろう。舌打ちが漏れる。なぜ皇帝に、俺が会った薬師がその『探し人』だとバレたのかは分からないが、とにかくこいつらをここまで連れて来たのは俺だ。

猛烈な後悔が脳内を支配する。俺はボナパルト王国に戻らなければならない。ただ、リタに危険が迫っているかもしれないのだ。なんとしてもリタに危険を知らせなくてはならなかった。

だが、奴らを彼女のもとへ連れていくわけにもいかない。

必死に足を動かす。その後ろから、クスクスと笑い声が追いかけてくる。

「おいおい。できるだけ動かない方がいいぞ？ その毒、動くと良く回るからな。まあ……俺としてはその方が面白いが……と、なんだ？ 木が!?」

嗜虐性を多分に含んだ声色に、突如として戸惑いが混じる。僅かに振り向けば、意思を持つかのように木々が敵の行く手を遮っていた。

「……感謝する」

なんとなく、この森が俺をリタの元へ運ぼうとしてくれているのを感じ、気づけば礼を口にしていた。まるで、それに応えるかのように、目の前に一本の獣道が拓かれる。

（この道を進んでいけば……俺は、彼女のもとへ辿り着ける）

体を襲う激痛に意識を徐々に蝕まれながらも、半ば這うようにしてその道へ足を進めた。



「アルの話、本当だったね……っていうか、改めて良かった。アルが無事で」
まるで自分が体験したかのように心臓がバクバク鳴っている。

胸元を押さえるリタに、アルは真剣な顔を向けた。

「だから、リタ。俺と一緒に逃げないか？ なんて言っちゃって、俺はボ——」

「い、いい。言わなくても。どうせ聞いても私には分からない、というか確かめる術もないから。それよりも、アルが提案してくれたボナパルト行きの話でしょう」

リタはこれ以上聞いたら頭がパンクしそうだと、食い気味に話を遮った。

緊張していたアルが拍子抜けした表情を浮かべる。そして、フツと笑った。

「なんで笑ってるの？」

「いや、リタらしいと思って。そうだな。お前に、俺のことなんて関係ないもんな。じゃあ、単刀直入に言う。リタ、俺はお前に恩返しをしたい。絶対に皇帝の手から逃がしてやる」

アルがリタに手を差し出す。そんな彼の顔と台詞がかっこよすぎて、リタは鼓動が跳ねるのを感じた。そして気が付けば、無意識に手を握り返していた。

「あ」

我に返り、ネロを見る。

「ふん、まあ……追手の話が本当だったことと、死に物狂いでリタのもとへ向かおうとした『執念』だけは認めてあげるわ」

そう言うネロのおでこにはたんこぶが出来ていた。ぷっぴいがネロにも彼の記憶を共有していたらしい。それを見た後ではさすがのネロもこれ以上、疑うことはできなかったようだ。

「……でも、アル。気持ちは嬉しいけど、本当にいいの？ もし皇帝にバレたらアルも巻き込まれる可能性が……」

「そんなの承知の上だ」

リタの不安をかき消すように、被せ気味にアルは答える。

「俺が何も考えずにこんな提案をするわけがないだろう。俺にはそれなりの伝手や力があるんだ。」

そこらへんは心配しなくていい」

「それに、いざとなったらアタシたちの力を使えばいいわよ！」

横槍を入れてきたぷっぴいを見て、リタは「え？ いいの？」と戸惑う。

「当たり前でしょう！ リタが捕まって困るのはアタシたちも一緒なんだから。それに……リタにはお願いがあるの」

真剣な口調になったぷっぴいに、リタも真面目に耳を傾ける。

「リタにはいつかアタシたちと本契約を結び、初代皇帝のお願いを取り下げてもらいたいの」

「そんなの、今からでもするよ？」

リタはそう言ったが、ぷっぴいは「ううん」と首を横に振る。

「それではダメなの。現皇帝との契約が生きている今の状態で無理に解除しても、また上書きで同じ永久契約をかけられるからキリがないもの。だから、まずはこのベッティオル王国を出てリタの安全を確保する。そして、現皇帝との契約が切れた頃に、リタに解除してもらう。これが一番確実な順序なの。……ってことなんだけど、リタ。お願いしても良い？」

必死に懇願してくるぷっぴいに、リタは力強く頷き返した。

「もちろん！ そのためにも私は絶対に皇帝より長生きしないとね！ ぷっぴいもネロも、みんな一緒に来てくれるんでしょう？」

リタの言葉に、ぷっぴいの表情がぱあっと明るく輝いた。

「当たり前じゃない！ アタシたちもついていくわよ。約束したでしょ。アタシたちはずっと一緒に

なんだからっ。……ということアル！ アタシたちのこともよろしくね！」

興奮気味のぷっぴいがアルにウインクしようとして、両目を瞑る。

それを見て、アルは噴き出しそうになるものの、手の甲で口元を押さえ、耐えた。

「っ、あ、ああ。もとよりそのつもりだ。……それじゃあ、明日にはこの村を出るぞ」

「ええ!? 明日!？」

驚きの声を上げるリタに、アルは困ったように眉尻を下げた。

「実は、国境付近にボナバルトからの迎えがもう来ているはずなんだ」

「え!? なら、その迎えの人、アルがいなくて今頃困っているんじゃないあ……」

「仕方ない。まだ森に奴らがいるかもしれない。それに、一日くらい待たせておいても問題ない」
「本当に？」とリタが訝しむが、アルは絶対に大丈夫だと言い張る。

結局、リタはまだ見も知らぬ待ち人に罪悪感を覚えながら、翌日出発することにした。



出発の朝、リタは湖の畔^{ほとり}に立ち、朝靄^{あさもや}に包まれた水面^{みなも}を眺めた。亡き母の瞳を思い出す深い青色の湖。ここで薬草を摘み、ぷっぴいたちと駆け回った日々が脳裏^{のうり}をかすめる。

「行ってきます。お母さん」

背負いカバン一つに詰め込んだのは、最低限の着替えと、母の形見の調査道具。

振り返ると、アルが少し離れた場所で、静かに待っていた。

「もういいのか？」

「うん。……もう十分」

自分にも言い聞かせるよう嘘を吐き、リタはアルの隣へと歩み寄った。

第二章 初めての馬車旅と、思いがけない人助け

リタが初めて乗った馬車、それは乗り心地最高……とは到底言える代物ではなかった。

「リタ、大丈夫か？」

「だ、大丈夫」

気遣ってくれるアルにリタはにっこり微笑み返したが、本当はただの強がりだ。お尻が痛い。車輪が石で跳ねるたび、硬い座面から容赦ない衝撃が突き抜けてくる。

——昨日の今日で森を出発し、アルの言葉を頼りに国境付近まで歩いたリタたちは、そこで無事に『迎えの馬車』と合流することができた。

今か今かと待ち構えていた男は、アルの姿を捉えると同時に感動のハグをしようとして、アルに肘打ちをされていた。今その男は、御者席から陽気な声を響かせている。アルの従者でもある彼の名はブルーノ。

「お二人とも、少々揺れますからお気をつけくださいね！ 自称、アル様の『美の守護者』であるこの私、お二人の美しいお顔に傷がつきでもしたら泣いてしまいますからねー！」

ブルーノはボナパルト王国でも名のある貴族の嫡男ちやうなんらしい。それがどういう風の吹き回しか、美の化身たるアルに心酔し、家柄も誇りも投げ打って側近兼、身の回りの世話を焼く従者の地位にお

立ち読みサンプル はここまで

さまっているんだそうだ。

そんな話を二人から教えてもらったリタだが、気になったのは、彼のことよりもアルの新情報について。実は——アルはある商会の会長らしいのだ。

（その若さで!? しかも、ボナパルト王国で商売をしているアルが、隣国のベッティオル皇国の皇帝に直接会うことができるなんて……きつと、かなり儲けているのね。それなら、命を狙われるのも納得……はできないけど、アルがそういう世界にいる人だってことは分かったわ）

リタが衝撃の事実に動揺している間も、ブルーノの語りは止まらない。

自分はアルが会長を務める商会の副会長なのだとか、主の許可も得ず勝手に『アル様公式グッズ』を量産しては売り捌いているのだとか、筋金入りの「狂信者」の一面が垣間見える。

饒舌なブルーノに、アルは不機嫌そうに吐き捨てる。

「だったら、もう少し平坦な道を選べ。このままだと舌を噛みそうだ」

「あはは！ おかしなことを言いますね、アル様。それだとお二人を密着させるため、あえて険しい道を選んでいく意味がなくなるではないですか！」

「おい、今聞き捨てならない言葉が聞こえたぞ!」

アルが吠えたと同時に、再び大きな振動がやってきた。

リタの体が目の前のアルに向かって、大きく傾く。咄嗟にアルが支えようと腕を開いた。

しかし、リタは持ち前の運動神経でなんとか耐える。

リタを支えようと開いた腕は行き場を失い、アルはその手を己の口に当てると、わざとらしい咳

払いをした。一連の動作をしっかり見ていたリタは、そつと視線を窓の外へと移した。

「……あ。景色が変わった」

「あ、ああ。そろそろ、到着するはずだ。今日はそこで一泊する」

「一泊？ アルの家じゃないの？」

「そうだ」とアルは首を横に振る。

「俺の家は王都にあるからもっと遠い。だから、今日は俺の母方の祖父母の別邸に泊まる」

「そうなんだ……」

知らなかった、と首を傾げるリタに、アルは少し気まずそうな表情を浮かべた。

「……皇帝の追手からは一旦逃げ切ったが、俺の敵を撒く意図もあるんだ。……すまない。リタを安全な場所に逃がすと誓っておきながら、巻き込む形になってしまった」

アルはリタに向かって一度頭を下げた。次いで、強い光を宿した瞳でリタを見つめ直す。

「だが、安全に最終目的地まで到着できる計画は用意してある。俺の不甲斐ない姿を知るリタからすれば不安だろうが……どうか、今回ばかりは俺を信じてほしい」

まっすぐに見つめられ、リタの脳裏に、彼の身に起きた一連の出来事がよぎった。

（そうかわ……アルは皇帝に会う行きと帰りで二度も命を狙われている。でも……黒幕に心当たりはあるみたいだし……それに、正直アルの敵ってそこまで強くなかったよね）

リタは自分で黒ずくめの者たちを撃退し、解毒したことを思い出した。

（……そう考えると、皇帝を相手にするよりはよっぽどマシね!）